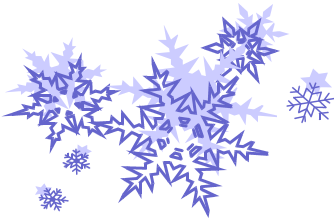


## 説教要旨「すがりつく思い」



マタイによる福音書 15章 21～28節

イエス様はティルスとシドンの地方に行かれました。この町は、地中海に面したフェニキア人の町で、ユダヤ人にとっては国境を越えた外国です。イエス様がこの異邦人の町で、一人の異邦人である女性と出合われました。このカナンの女には、悪霊にひどく苦しめられている娘がいて、彼女はイエス様にその娘の助けを求めました。しかしイエス様はこの時、この女性の願いを退けました。しかも丁重にお断りしたではありません。彼女の叫びになんら反応せず、冷たく彼女を無視するのです。それでも叫びながらついて来る彼女に、イエス様ははっきりと拒否を告げますが彼女はひるみません。ひれ伏して、なおイエス様に助けを求める彼女に、イエス様はさらに厳しい拒否を告げられるのです。「子供たちのパンを取って小犬にやっちはいけない。」(26節)

もし私が、このカナンの女性の立場であったなら、最初に無視された時点で諦めてしまうかもしれません。あるいは「子犬」だなどと言われたことに腹を立てて、なんて了見のせまい野郎だなどと、イエス様の悪口を言いふらすかもしれません。しかし、この女性はそうしませんでした。小犬だと言われて、「自分は子犬なんかではない」と言い返すのではなく、「主よ、ごもつともです。」と、自分が子犬にすぎないと認めた上で、「しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」と切り返したのです。イエス様は“子犬”であることを受け入れてなお救いを求める彼女に“信仰”を見出し、その願いを聞き届けられました。

私たちの救いは当たり前ものではありません。本当なら、見捨てられ、滅びるしかない“子犬”にすぎないです。にもかかわらず、神様が私のことをただ、憐れんで下さってその独り子を遣わしてくださいました。神の独り子であるイエス様もまた、私たちを憐れに思ってください、本来なら滅びるしかない私たちを救うために、十字架へと歩まれるのです。“子犬”にすぎないこの私を、救いへと招いてくださっている救い主を見つめつつ共に歩んで参りましょう。